



ノリは体育会
フットワーク軽やかに
道を拓く

野村証券株式会社 北九州支店勤務

廣木将仁

ひろき まさひと
1991年4月13日福岡県北九州市生まれ。2010年東福岡高校卒。2014年9月専修大学法学部法律学科卒。14年9月から社会人サッカークラブ早稲田ユナイテッド所属。15年1月から某投資ファンドでインターン。15年8月に野村証券内定、16年4月より勤務。1カ月の研修ののち、北九州支店配属。

大学では体育会サッカー部に所属。プロを目指していたが挫折。そして、人より半年余分にかかり卒業。大学は出たものの、進路は定まらなかった。そんな時、ある人との出会いで、人生が大きく動き出す——現在は証券マンとして働く廣木将仁さんの、ほかに例のない“体育会的”道のり。

廣木将仁さんは現在、野村証券北九州支店で働く。株や投資ファンドなどの金融商品を扱う営業職だ。土地柄、顧客には土木、建設関係の経営者が多いという。

「親しくなれば、食事や飲み会、ゴルフなどの付き合いも多いです。それも仕事です」

ひとたび心を開いてくれれば、面倒見のいい人が多いという。お客様の紹介で、さらにお客さんが増えていく。

「自分の父親よりも年上で、投資歴30、40年という方も少なくありません。お客さんから教わることも多い。わからないことがあったら、帰ってから必死に勉強しています」

付き合いと勉強で、睡眠不足になりがち。毎朝、目覚めると、まずはノリのいいロックを大音量で流して、テンションを上げてから出社するそうだ。

職場は戦闘モード。活気にあふれている雰囲気は、「性に合っている」。

プロの夢を抱き上京、卒業までに4年と半年

物心ついたころからサッカー一筋。高校は名門、東福岡高校。そこでの活躍が専大サッカー部源平貴久監督（H7経営卒）の目に留まり、スポーツ推薦で専修大学に入学した。

プロを目指していたが現実には厳しく、厚い選手層



↑2010年、『育友』123秋号で体育会サッカー部取材。撮影した写真の中に、偶然にも当時1年生の廣木さん（右）を発見。源平監督と親しげに話す様子はいかにも廣木さんらしい

の中で一軍には定着できなかった。

「プロ入りする選手は1年生のうちから活躍している。それができなかったらプロ入りは難しいと思っていました」

上京から1年、プロの夢は断念。そして気づけば単位を半分近く落としていた。

「2年から心を入れ替えて、1限から5限までびっしりと授業を受けました。それと、勉強できる人と友達になって、テスト前はノートを貸してもらったり——」

本人の努力、そして周りの多大な協力の結果、4年と半年で法学部法律学科を卒業した。

先の見えない状況から一転、金融を目指す

この卒業前後の時期は、「人生で最も挫折を感じた時期」でもあった。「この先、どうなる？」という不安が、常に付きまとった。

とりあえずは、サッカーの社会人クラブチーム早稲田ユナイテッドに所属。同クラブの下部組織で小中高生のコーチを務めつつ、自らもプレーした。しかし、満足な収入を得られたわけではない。

専大の就職課も利用した。誰もが知っているようなスポーツ用品メーカー、カード会社なども紹介されたが「どうにも気が進まない」。将来は見えないままだった。

そんな折、早稲田ユナイテッドの先輩の紹介で、ある投資ファンドでインターンをするようになった。

「自分は要領よしのイエスマン。先輩から声がかかったら二つ返事で行きますって」

行ってみると、実情は社長の付き人のようなものだった。しかし、この人物との出会いがターニング

ポイントとなる。

「厳しい人です。この商品を手しろといわれれば、都内を駆けずり回ってでも探しました」

しかし一方で、社長に連れられそれまで行ったことのないような高級料亭に出入りしたり、会ったこともないような資産家に出会ったりもした。

そんな生活を続け3カ月ほど経ったある日、社長から「将来何したい？」と聞かれる。「稼ぎたいです」と答えると、「じゃあ、金融業界がいい」。それから社長のもとでの勉強が始まった。

「それまであまり勉強をしてこなかったもので、基本的な計算問題から勉強しました」

さらに模擬面接もしてくれたが、「どれだけ泣かされたかわからない」というほど厳しいものだった。

そして、社長からプレゼントされた真っ赤なグッチのネクタイを締めて臨んだ野村証券の面接。見事内定を得た。

フットワーク軽く、メンタル強く

昔から、人の誘いを断ることはほとんどないという。それは良くも悪くも働く。大学1年次は寮の先輩に誘われるまま、遊びが過ぎてしまった。しかし、「体育会に入っていて、よかったと実感している」。

「上下関係など時として理不尽なこともありましたが、でも社会に出れば、そういうことは普通にある。それを学生時代に、身に付けられたのはよかったと思います」

お客さんや先輩から声が掛ければ、飛んで駆けつける。フットワークの軽さは可愛がられる理由かもしれない。

「東大、京大、早慶など、周りは優秀な人ばかりなので、自分のような、プライド捨ててバカになれるタイプは珍しいのだと思います」

仕事でわからないことがあったら、周りの人に何でも聞いてしまう。求めれば、手は差し伸べられる。

「職場は元気があって、しかも勉強ができる奴が揃っている。ここでは、メンタル強くないとやっていけません。厳しいけれど、そうした中でやることで成長していけると思います」

「引きが強い」とでもいうのだろうか。まるで自分に必要な人を引き寄せる磁力を持っているようだ。将来は、海外に出て、サッカーに関わることをしたいともいうが、廣木さんが望めば、なんとか実現してしまいたい。